日本古典全書

十六夜日記 他

朝日新聞社編刊
日本古典全書

監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　藤村作　和辻哲郎

海道記・東關紀行

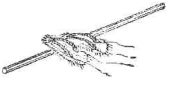
校註　玉井幸助

十六夜日記

校註　石田吉貞

昭和二十六年四月五日印刷・昭和二十六年四月十日發行・朝日新聞社編刊・日本古典全書「海道記・東關紀行・十六夜日記」・校註者玉井幸助・石田吉貞・編集兼發行者東京都千代田區有樂町二の三朝日新聞社杉山胤太郎・整版所兵庫縣津名郡志筑町一五八九井村印刷所・印刷所東京都台東區龍泉寺町三六五明善印刷株式會社・發行所東京都千代田區有樂町・大阪市北區中の島・小倉市砂津・朝日新聞社

定價　二百三十圓



古人の踏んだ東海道

玉井幸助

一　鎌倉時代までの記錄

東海道といふ名は、古く日本書紀に見え、今日に至るまで一千數百年の長い間つかはれてゐる。もと皇都から東方の諸國へ通ずる道が二筋あり、山によつたものを東山道、海に沿つたものを東海道と呼んだのである。道の名であるが、またその道筋にあたる國々のことをもいふので、東海道といへば伊勢から常陸までの十五國をいふのである。上代には專らエゾの住んだ地方であつたから、後世までもその地方に住む者を呼んで東夷といひ、あづまえびすといつて、その文化の低いことを賤しみもし、その風俗の剛强なのを恐れもした。

日本武尊が巡視せられたころは主としてエゾ種族の住所であつたのだが、その後、中央貴族が下つて諸地方に定住し、朝鮮からの移民も諸所に住居するやうになつて、東國特有の文化が形造られるやうになつた。かくて平安時代に入ると、資源開發のために中央と東國との關係がますます密接になり、鎌倉幕府創立以後はいよいよ京・鎌倉の往來が頻繁になつた。

東海道五十三次、江戸日本橋を振出しに京都の三條大橋まで五十三の宿次を置き、驛馬・傳馬を次ぎかへて旅したのは江戸時代のこと、まだ醒めやらぬ昨日の夢である。寢臺車の一睡、飛行機の一閃に比べたら、蟻が這ふやうな、もどかしい旅であるが、それでも幕末時代に將軍宣下の勅使として江戸へ下つた某公卿が、「君が代はうまやうまやに旅寢して草の枕も知らで來にけり」と詠んだといふ。なるほど上代の旅に比べたら、汽車はなくとも飛行機はなくとも、君が世のありがたい旅であつたに違ひない。

東海道の旅で最も古く知られてゐるのは、古事記・日本書紀に記された日本武尊の東方巡視である。尊の東征は第十二代景行天皇の四十年（西紀一一〇）、今より一千八百年も前のことである。尊は大和の都を出發して伊勢大神宮に參拜し、そこに奉仕してゐられた御をば倭姫から劔と火打袋とを餞別にいただいて行かれた。この二つの品は、當時の旅では缺くことのできない必要品であつた。尊は伊勢から尾張・駿河を經て、相模から舟で上總に渡り、さらに海路、安房・下總の海岸に沿うて常陸に上陸し、北上川流域地方、そのころの日高見の國まで進んで歸途につかれた。歸路は常陸から甲斐に出で、武藏・上野を經て信濃に入り、美濃に出で尾張に到り、近江の伊吹山の賊を攻めて病にかかり、伊勢の能褒野でなくなられたのである。

尊は往復とも、尾張では宮簀姫の家に泊られたといふから、中央に關係のあつた地方豪族の家に宿泊せられるといふやうなこともあつたらしいが、多くは露に臥す草の枕の明け暮れであつた。甲斐の酒折の宮

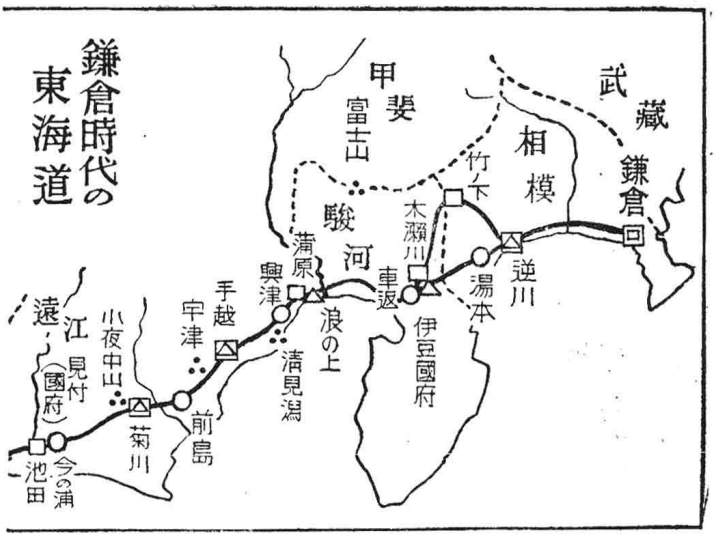
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で火たきの翁に、「にひばり筑波をすぎて幾夜か寢つる」と詠みかけられた夜の光景は、さうした旅の有様を髣髴せしめる。能褒野でなくなられたのも、野中の草の庵においてのことである。當時の旅には馬も車もない。近江で病を得られてからは、歩行も苦しくなられたけれど、他に方法はなかつたのである。

これに次ぐ記錄としては、伊勢物語、業平のあづまくだりがある。業平は平安時代の前期元慶四年（西紀八八〇）に死んだ人であるから、この旅行は今から一千百年ほど前のことである。日本武尊からは八百年近くも時が經過して、このころはもう旅行に馬も用ひられた。三河の八橋で「その澤のほとりに木かげにおりゐてかれいひ食ひけり」とあるのは馬からおりて休んだのである。

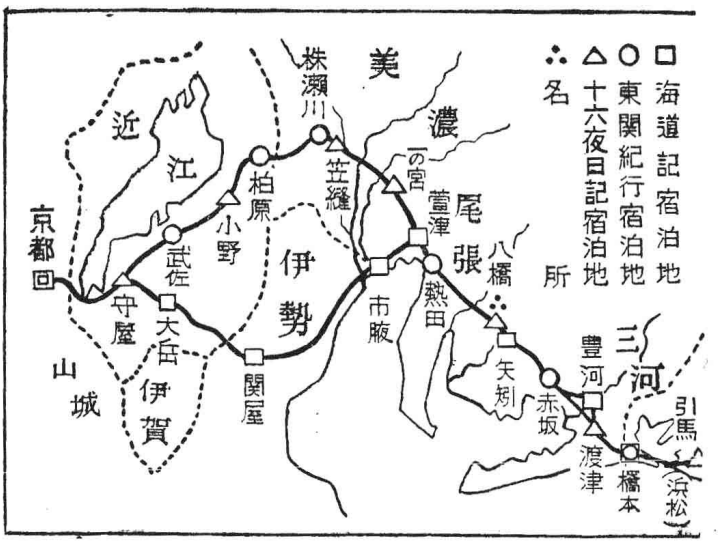
次に更級日記がある。作者菅原孝標の女が、父の任國上總から京都へ歸る道中のことを、この日記の初めに書いてゐるのであるが、それは平安時代中期寛仁四年（西紀一〇二〇）、今から九百三十年前のことである。この旅行では、女は手車に乘り、男は馬に乘つたことが知られる。

次に鎌倉時代に入つて、海道記（貞應二年・約七三〇年前）東關紀行（仁治三年・約七一〇年前）十六夜日記（建治三年・約六七〇年前）の三書が最も細かに東海道の旅を記してゐる。室町時代以後江戸時代にかけても數々の紀行があるが、今は一切を省略し、伊勢物語以下、十六夜日記までの五書によつて、古人の踏んだ東海道を偲んで見よう。



二　順路と日程

以上の旅行者がどういふ順路によつたかといふに、伊勢物語では第七段に「伊勢・尾張のあはひの海づらをゆく」とあるので、京都から伊勢路へ出て海道を下つたことがわかる。海道記も伊勢路によつた。そして都を出てから第十三日目に竹の下に泊り、そこから足柄山を越えて逆川に出て一泊し、第十五日目に鎌倉に到着した。伊勢物語には足柄・箱根の記事はないから、業平がいづれの道を通つたかは分らない。ところが、東關紀行では京都から近江路へ出て海道を下り、第十一日目に車返に泊り、翌日箱根を越えて湯本で一泊し、第十三日目に鎌



倉に到着した。十六夜日記もこれと同じ順路をとり、第十二日目に伊豆の國府三島に泊り、翌日箱根を越えて酒勾（海道記の逆川）に一泊し、第十四日目に鎌倉に到着した。

右の四書はいづれも京から東へ下つたのであるが、更級日記のは上總の國府から京へ上つたのであつて、足柄山を越えたことは海道記と同じであるが、京へ入る時には東關紀行・十六夜日記と同じで美濃・近江を通つた。

むかし東國へ通ふ道は、京都から伊勢へかかるものと、近江・美濃へかかるものと二つあり、この二つは今の名古屋のあたりで合する。また相模の國へ入るときに足柄山を越えるものと箱根山を越えるものと二

つあつた。この二つは今の酒匂のあたりで合する。もと足柄が本道であつたが、桓武天皇の延暦十九年に富士の噴火で路がふさがつたために箱根の新道が開かれ、後に足柄路も復舊して兩道が用ひられることになつたのである。十六夜日記に「足柄山は道遠しとて箱根にかかるなりけり」と書いてゐる通り、箱根越えは近道ではあるが險しく難儀な道であつた。

次に日程を調べて見ると、更級日記では上總の國府、今の市原郡惣社の邊から京都まで約百六十里、それに九十一日を要してゐる。もつとも、和名抄によると「上總國府在市原郡、行程上三十日、下十五日」とあるから、公定では、上り三十日の定めであつたが、更級日記の場合は病氣その他の事故で途中の逗留が多かつたのである。それにしても、そのころの旅行がいかに不便なものであつたかを察するに足る。鎌倉時代になると、海道宿々の設けも備はり、旅に要する日數も大體一定するやうになつた。海道記では伊勢路をとり足柄を越えて鎌倉まで約百三十里、それに十五日を要してゐる。平均一日九里弱である。東關紀行と十六夜日記は近江路をとり箱根を越えて鎌倉まで約百二十五里、東關紀行は十二日を、十六夜日記は十四日を費してゐる。これは一般旅人の日程であるが、東鑑によると、建久元年に源頼朝が初めて入洛した時には三十四日を費してゐる。これは盛な行列を作り、堂々たる覇者の威風を示した旅で、特に所所の滯在も多かつたからである。次で建久六年に第二回上洛のときには日數二十日であつた。暦仁元年正月、將軍頼經が入洛したときも二十日、頼經が職を退いて寛元四年七月歸京したときは十八日であつた。

この賴經を送つた人々が京から鎌倉に歸つたときは十二日であつた。思ふに一般旅人の旅行には十三四日を費すのが普通であつたらしい。ただし通信を職とする飛脚は七日を規定とせられ、特に火急の場合には早馬で晝夜兼行の急使を仕立てた。實朝の變を告げる使者加藤判官次郎は行程五ケ日と定められ、承久元年正月二十八日の晩に鎌倉を出發して二月二日入京、九日歸鎌と東鑑に記されてある。また賴經が將軍職を賴嗣に讓ることを京都に申す使者平新左衞門尉盛時は行程六ケ日と定められ、寛元二年四月二十五日の黄昏に鎌倉を出發して五月五日に歸つて來た。また北條經時の死を京都へ申す飛脚は行程三ケ日と命ぜられ、寛元四年閏四月一日に差遣されて四日申の刻に京都に着いた。これが最も日數の少ないレコードである。

三　古人の旅情

飛脚は一種の通信機關であるから旅とはいへない。飛行機の旅はどんなものか、經驗がないから何ともいへない。汽車の旅は窓外の景色に心を慰め、乘客のとりどりに浮世の姿が味ははれるのも興あることだが、それにしても、昔の旅人が自然の懷に抱かれて、淋しい自分をじつと見つめた旅の心は、どんなに情深いものであつたらう。まづ伊勢物語について見ると、

行き行きて駿河の國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わが入らんとする道はいと暗う細きに、蔦か

づらは茂りて、物心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道にはいかでかおはする」といふに見れば見し人なりけり。京に、その人の許にとて、ふみ書きてつく。

するがなるうつの山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり

遠く都を離れた淋しい山の細道で、思ひかけず見知りの修行者に行き逢つて都へたよりを托すのである。

なほゆきゆきて、武藏の國と、しもつふさの國との中に、いと大きなる川あり。それを隅田川といふ。その川のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡し守、「はや舟にのれ、日も暮れなん」といふに、のりて渡らんとするに、みな人、ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥の、はしと脚と赤き、しぎの大きさなる、水の上に遊びつつ、いををくふ。京には見えぬ鳥なれば皆人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなん都鳥」といふをききて、

名にしおはばいざことはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と、よめりければ、船こぞりて泣きにけり。

昔の旅人が大川を前にしたときの心持を、今のわれらに思ひやることが出來るであらうか。山はいかにさかしくても、足さへあれば再び越えて歸ることも出來るであらうが、川はさうではない。渡れば故郷と緣が絶たれてしまふのである。日も暮れがたの隅田川、ほのかに白く流れる水を前にしては、早や舟に乘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れといはれても、ためらはれるのは無理もないことである。

更級日記の旅はそれとは反對に、あこがれの都へ歸つて行くのであるが、それにもまた、所々に心ひかれて立ち去り難いことが多い。作者の乳母は出立前に夫を失ひ、しかも途中で出産をして、野中のいほりに一人殘されることになつた。太井川の岸、松戸の渡しに泊つた夜、作者は兄に連れられて、この乳母の假屋へ見舞に行つた。藁ぶきの小さな小屋に月の光がさしこんで、紅の衣を上に着てうちなやみ臥したる乳母を、白く淸げに照してゐる。乳母は作者の髪をかきなでながら、別れを悲しんで涙を流す。いとあはれに見捨てがたく思ふけれど、明日の出立を控へてゐるので、急いで連れかへされる悲しさ、乳母の姿が目にちらついて一晩中眠ることができなかつた。

また足柄山の麓に庵を作つて泊つた晩、原始林が空を蔽うて晝さへ暗い所、折からの闇夜、雨さへ淋しく降りそそぐ。庵の前には篝火がたかれた。火勢がつのると、闇の一部が圓く大きく明るくなる。と思ふと、やがてまた暗闇が焚き火を目がけて押寄せて來る。闇と光が、かうして鬪つてゐる圓光の中へ、どこからともなく、三人づれの遊女が現はれた。五十ばかりの老女と、二十ばかりのと、十四五歳の少女である。人々はこれを庵の前に坐らせ、傘の下で歌を謠はせたのであるが、きれいな少女が美しい聲で歌を謠つて、やがてまた闇の中に消えてゆく。人々は感に打たれて涙を落した。時に十三であつた作者は「幼なきこころちには、ましてこの宿りを立たむことさへあかずおぼゆ」といふほどまで、心をひかれたのであつ

た。

伊勢物語の旅には一人二人の友があつたし、更級日記の旅は一家六人、他に家來たちも大勢つきそうてゐたのである。それに比べて海道記のは全く身輕な一人旅であつた。海道記の作者は世をわびて出家した人であるが、人の世のなつかしさは、捨ててますます深いのであつた。それは決して未練ではない。在俗の世には味はふことの出來なかつた深い愛に目ざめたのである。作者は、かうした心で風物を味はひながら、とぼとぼと海道を下つたのである。

東關紀行の作者は、自らを「身は朝市に在りて心は隱遁にある者」といつてゐる。どういふ境遇の人か分らないが、とにかく浮世の榮華を求めない氣樂な人であつたらしい。文章に海道記ほどの深い觀照はないが、流暢な筆で景色を美しく敍してゐる點に特色がある。これも一人旅であつたらしいが、海道記に、「獨身の遠行を企つ」とあるやうな明らかな證據がないから斷定はしかねる。その上、蒲原の宿を通るときに「おくれたる者まちつけんとて云々」とあるのが都からの同行者かとも思はれるので、いよいよ定めかねるのであるが、これは豐河の宿や舞澤の原の記中に見えるのと同じやうに途中の道づれであらう。

十六夜日記では、作者の第一男と思はれる阿闍梨の君が同行した。そのことは出立のところにも宇津の山のところにも出てゐる。この阿闍梨は山伏であつたといふから、阿佛尼のやうな老女にも心强い旅が出來たことであらう。この旅行は、子供のために訴訟をするといふ現實問題に追ひたてられてゐたので、「わ

が子ども君につかへん爲ならで渡らましやは關の藤川」とか「いのるぞよ我が思ふことなるみがた」とかいふようなことに心が支配され、またこの旅日記を都の子供に送つてやつて、名所歌や旅の歌を詠む手本にさせようといふ功利的な目的もあつたやうだが、それでも旅に出れば心の塵が洗はれて、しみじみとした旅情に浸ることも少なくなかつた。

四　海道筋の文化

前にもいつたやうに、日本武尊の東征は徒歩であつた。旅行に馬が用ひられるやうになつたのはいつのことか明らかでないが、日本書紀神功皇后五十年の頃に初めて路驛の文字があらはれ、下つて欽明天皇三十二年の條に驛馬のこと、推古天皇の紀には驛使のことも見えてゐるので、そのころから馬が用ひられたといつてよいが、確實なのは孝德天皇の大化二年に驛制を定められてからのことである。ついで文武天皇の朝に大寶令が完成し、それによると、都を中心として諸國へ通じる道を驛路と稱し、驛路には大中小の三種がある。太宰府へ通じるのが大路、東山・東海の二道が中路、その他の諸國の國府へ通じるのがすべて小路である。驛路には六丁を一里として三十里ごとに一驛を置く。驛は「うまや」ともいひ、旅行用の馬を設備して置く所である。馬の數は一驛に大路二十疋、中路十疋、小路五疋を定置する。馬だけではなく、乘馬の用具、簑笠なども馬數に準じて備へたのである。驛の他に各郡に傳を置き、傳には馬五疋を備

へた。急用には驛馬を用ひ、その他には傳馬を用ひた。驛の川岸海灣にあるものを水驛と稱し、水驛には馬の代りに舟四艘以下二艘以上を備へた。驛馬・驛船・傳馬などを取扱ふのはその地方の家から選んだのであるが、その家を驛家（エキカ）または驛戸（エキコ）といひ、驛家の中の富裕者で才幹ある者を選んで驛長とした。驛家には宿泊も許されたのであるが、それは公用の場合であり、官吏でも私の旅行には驛泊はむづかしいのであつた。養老令の定めでは、五位以上の者の私の旅行で驛泊を欲する者には之を許す、特に不便の土地で他に方法のない場合は初位以上の者にも許す、しかし何れも宿泊するのみで一切の供給を受けることは許さないとある。すなはち宿泊だけで、食事は自ら調達しなければならないのである。

官吏でもこの通りであるから、鎌倉時代に入るまでは、一般庶民の旅行は殆ど不可能であつた。たまたま必要にせまられて四五日の旅をするにも、食糧寢具を携帶して行くのであるが、その食糧を煮炊きするのが容易でない。うつかり村里の近くで煮炊きをして附近の住民に見つかりでもしたら、言ひがかりをつけられるのがきまりである。それは火の清淨を保つといふことを立て前にするのであつて、もしそこが汚れた場所であつたら火の神のたたりがあり、村の者がめいわくをするから、被をして贖物を出せと言ひかかるのである。それに類した話でこんなこともある。出稼ぎ人が國へ歸る途中で仲間の一人が發病して行き斃れた。すると近くの家の者たちが飛び出して來て、なぜおれたちの家の前で死んだのか。「はらへ」をして早く死骸を持つて行けといふのである。被をするといふ言葉が、借金の仕拂でもするやうな意味に

なつて來たのである。そんな風であるから一般庶民の旅行といふことは殆どなく、從つて庶民の文化はいつまでも開けなかつた。

さて業平は有位の人であつたから、東下りは私の旅ではあるが驛泊も許されたであらう。しかし伊勢物語には泊つたことの記事は一つもない。ただ三河の八橋で「木かげに下りゐてかれいひ食ひけり」とあるから、食糧として乾飯を携帶してゐたことが知られる。藤井高尙の伊勢物語新譯には、この「かれいひ」を旅の辨當と解し、眞の乾飯ではないといつて眞淵の解釋を駁してゐる。その根據として續日本紀の文を引き、元明天皇の和銅五年に錢貨を作られたから奈良時代以後は旅人が食糧を負擔する勞はなくなつたはずだといふのである。しかしこれは偏した議論で、錢貨が出來たからといつて、それがすぐに地方にまで流通したとは思はれない。とにかく業平が乾飯を携帶してゐたのは確かなこととといはなければならない。もつとも土佐日記には、その正月十四日の記に、「かぢとり昨日つりし鯛に、錢なければ米をとりかけて……かかること多くありぬ。かぢとりまた鯛もて來たり。米酒しばしばくる。かぢとりけしき惡しからず」などあるのを見ると、このころ錢貨が使用せられてゐたことは知られるが、それにも錢がなければ米酒を以て物々交換を行つてゐる。やはり旅行者は自らの食糧を携帶してゐたのである。なほ土佐日記の旅は都に近い土佐のこと、さらに伊勢物語から八十年も後のことである。

更級日記には食糧に觸れた記事はないが、そのころの東海道に宿屋の設けがなかつたことはよくわかる。

すなはち到るところで庵を作つて泊つてゐる。近江の國では「おきながといふ人の家にやどりて四五日あり」とあるから、知人の家に宿泊したこともあるわけだが、上總を出てから京に着くまで九十一日の長い旅に、宿屋に泊つたことは一ケ所も記してない。我が國の旅館の沿革について、吉田十一氏が日本旅行史に書かれた要點を左に抄出しよう。

我が國では旅館のことを古く「はたごや」と呼んだ。「はたご」はもと馬の飼料を入れる籠のことで和名抄に「波太古、俗用二旅籠一字一」とある。それが後には旅行用の調度食糧を入れる物の意となつて專ら旅籠と書くに至つたらしい。宇津保物語吹上(下)の巻「はたご二かけに道のほどの物を入れて馬におほせたり」とあるのはこれで、その馬を、はたごのうま、はたごの駒などといふ。宇津保物語の同じ巻に「はたご馬は嵯峨の院に、わりごはきさいの宮に云々」宇治拾遺物語巻七第五話に「喉の乾けば水飲ませよとて消え入るやうにすれば、供の人々てまどひをして、近く水やあると走り騒ぎ求むれども水もなし。こはいかがせんずる、御はたご馬にや、もしあると問へば、遙かにおくれたりとて見えず」藤原爲家の歌に「旅人のはたごの馬の行きぶりに夏野の草をすさめやはせぬ」覺性法親王の出觀集に「あぜ傳ふ小田の中みち霧こめてはたごの駒もあしみたどれり」などあるはこれである。

かやうな關係から「はたご」といふ語が旅に密接な關係を持ち、宇津保物語祭の使の巻に「はたごぶるひ」といひ、平治物語惟宗經方の條に「はたごぶるまひ」とあるは、無事に旅行を終へて祝宴を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com